

家族レジリエンス尺度作成に向けて

得 津 慎 子

Towards Development of Family Resilience Inventory

Shinko Tokutsu

Abstract : F. Walsh remarks family resilience as one of the strengths in the family, referring to coping and adaptation process in which the family is suffering and recovering from crisis and adversity. According to Walsh, Family Resilience is the strength of struggling well and rebounding forward. This concept emanated from the paradigm of system theory, so it is not to be introduced as just a risk preventive factor, but as positive concept for encouragement of family strength and healthy potentiality. Talking of family resilience, the interaction of family interrelationship and individual/ child resilience should be more considered as well, so that I introduce some the discussion about child resilience.

For the sake of adapting of this concept in clinical settings, developing Family Resilience Inventory (FRI) is assumed to be effective. As the first step, FRI of 44 questionnaires, which are based on 9 factors of family resilience concept by Walsh was constituted. I report the result of pre-test for University students to examine FRI. Also, I interviewed two women about "Family crisis and the way to recover."

As the results, for refining the FRI questionnaires further, it is emerged that more detailed consideration about the narrative of the individual history should be required, for family consists of individual member of the family.

Key words : 家族レジリエンス family resilience 家族レジリエンス尺度 Family Resilience Inventory ストレングス strength 家族危機 family adversity システム論 system theory

始 め に

家族レジリエンス概念について、筆者は「家族援助における家族レジリアンスという視点—システム論に基づく家族療法の事例を通して—」¹⁾、「家族レジリエンスの家族支援への臨床的応用に向けて」²⁾等を通して紹介しているが、ワルシュが『Strengthen Family Resilience』³⁾ (1998) で論述したセラピスト^{註1)}が家族に働きかける9つの要素を取り上げ、家族レ

ジリエンス概念を実践可能なものとして汎化すべく家族機能尺度 (Family Resilience Inventory、以下 FRI) の作成を試みた。

ワルシュ (1996、1998、2003)^{4~6)} は前掲論文で報告したように危機的状況を通して家族が家族として回復する可塑性を「家族レジリエンス」という概念として呈示し、家族システムに内在するその力が機能するように家族システムに働きかけることが家族療法において有用であるとしている。ワルシュはシステム論的な立場

註1) ここでのセラピストの意味は、家族と話しをすることで家族が困難から脱却できるような支援を行う専門家ということであるが、家族療法においては、従来より一般的に家族療法家、ファミリー・セラピストの呼称が使われてきているので、便宜上セラピストという呼称を用いる。

に立って、家族のプロセスを機能的結合と見、「健全な家族は問題がない」との信念や「ノーマル」な家族についての信念は、病理モデルに基づいた家族「神話」であるとし、個人の困難、危機的状況やその継続は個人、家族、環境的要因の相互作用として理解されるべきで、すべての家族はレジリエンスが最大限に機能する可能性を持っていると述べている。

家族レジリエンスとは危機的状況を通して家族が家族として回復する可塑性、復元力であり、よく奮闘することであり、前向きに戻ることであり、Hawley ら (1996)⁷⁾は、家族レジリエンスは「過去や現在の累積したストレスに直面したときに家族が適応し、元気になるために家族がたどりうる拠り所」と定義し、家族の置かれたコンテクストや発達のレベル、予防的、危険な因子の相互作用的な結合や、家族の共有見解に言及している。

本稿では、家族レジリエンス尺度作成とその検証のための数量調査の予備調査と半構造的面接調査の結果を報告するものであるが、それらの分析に当たっても、調査の窓口は個人であり、家族レジリエンスと個人（子ども）のレジリエンスの関連についての考察が必要であることから、「家族レジリエンスの家族支援への臨床的応用に向けて」⁸⁾で紹介したウォーリンら (1993)⁹⁾のチャレンジモデルとしての7つの子どものレジリエンス^{註2)}に加えて、子どものレジリエンスについての知見について述べ、次に予備調査について概観する。

子どものレジリエンス

子どもの発達について、その病理的な面や予防的な面にのみ焦点付けるのではなく、子どもが

逆境に打ち勝ってサバイバルする力を持つ鍵概念としてのレジリエンスに関しての先験的な大規模調査であった1980年代からのハワイにおける Werner¹⁰⁾らの大規模調査や、Norman Garmezy¹¹⁾らを中心として、苦境にある子どもたちの能力とレジリエンスの30年に及ぶ「The Project Competence」調査等で、地域的、養育上の諸問題が深刻な環境にあっても子どもたちが健全に成長する「違いをもたらすもの」が何かについての関心と興味の上に調査が行われて来ているが、個人のレジリエンスと言ったときに、ひとのワーカビリティには、遺伝的なもの、個人的なもの、個人的なレジリエンスを左右する家族や地域の影響性、さらに教育の重要性、子どもとの関係上意義深い大人がメンターとしての役割を果たすこと、離婚や別居等の悪影響、障害を持つ子どもと、障害を持つ親等の様々な要因が考えられている。それらを超えて、本概念が有用に臨床に用いられるには、その基本にシステミックなスタンスを持つ必要がある。

ラター¹²⁾らは「The Project Competence」等よりの知見に基づき、子どものレジリエンス基盤のアプローチについて、ミクロ、マクロにどのように活かしていくか、さらにどのような調査が望ましいかを概説している。レジリエンスは異なった危険なコンテクストや異なった発達段階における保護的、脆弱な力のバランスの転換を含むダイナミックな過程であり、苦境や発達段階を含む。レジリエントな適応は周囲との良好な関係を持っていることが示されているが、少なくともひとりの支持的な大人との強い関係が重要である。これは、第1養育者で、一番早期で基本的なものであるが、家族の外での

註2) ウォーリンらの提唱した子どものサバイバのために潜在する7つの個人のレジリエンスは、物事を適切に理解し、知り、感じる①「洞察」力であり、まず自立し、距離を置き、スタートする②「独立性」であり、何かや誰かに愛着し、自分から他者との関係を募り、結びつける③「関係性」であり、何かをうみ出し、それに取り組み、詳しく探ろうとする④「イニシアティブ」であり、笑いの⑤「ユーモア」と何かを構成できる⑥「創造性」が、形作ったり、遊んだりすることを可能にするものである。さらに仕え、大事にし、善し悪しを判断する⑦「モラル」の力である。

人間関係も重要である。

当然、子どもたちに影響を与えるのは「個人の属性」、「家族の質」、「家族以外のサポートティブなシステム」¹³⁾であるが、レジリエンスを定義するにあたっての二つの前提として、まず、そのひとつが「うまくやれているか」ということと、第2に克服すべき危機や苦境にある、もしくはあったかということがある。つまり、レジリエンスは児童の発達研究から出て来たとは言え、あくまでも性格の一つというよりも個人の行動や生活パターンにおいて個人のレジリエンスがどのように機能するかということに立脚する (Wyman et. al, 2000)¹⁴⁾。ラターらは、レジリエンス自体は直接的には測定不可能であり、危険とそれに対する適応の二つの要素の直接的測定に基づいて推測されると述べている。レジリエンスにしばしば関連する個人の属性とそのコンテクストを、個人差・関係性・地域の資源と機会としており、その個人差としては、IQ 等の認知能力、自己効力感、気質と個性や人生への肯定的見通しによって例えば衝動性のコントロール等をあげている。関係性については、親の育児能力（暖かさ、構造と監視、期待も含めて）、能力ある成人との密接な関係（両親、親戚、メンター）、特に年長の子どもたちとのルールを形成した上での仲間との関係等を挙げている。さらに、地域の資源と機会としては、良い学校やクラブや宗教のグループのような社交前段階的な組織との関係、近隣の質、社会福祉と社会的保健の質を挙げている。それらが突出した危機の緩和因子として危機を緩和するのだが、それに当たって機能的な家族環境が慢性的な苦境から子どもたちを和らげ、両親と家族システムのレジリエンスに呼応するものであり、また、コミュニティは、良くも悪くも親や家庭よりも影響を与える場合がある。近隣のおとなたち、地域への帰属感等が機能する面もある。家族関係は社会化前段階の対人関係を形成するにあたって重要であるが、子どもたち自身の性格特性よりもレジリエンスを維持する

には環境的な面の寄与するところが大きい。

ラターらは、レジリエンス基盤アプローチの一層の調査研究の必要性を説くが、何よりも親子関係、より一般的には養育者のウェルビーイングの質に取組まねばならないことを力説する。そのためにも関係者との協働的なコンサルテーションやマニュアル、厳密な評価等が厳格なエバリュエーションの対象となるべきであると語る。つまり、両親の精神保健に留意し、親子関係を活用し、介入終了後の利点を維持するように家族の可能性を促進し、実行できるかぎり早く、長く扱い、幼児期だけでなく、児童・思春期等の発達上の危機を考えあわせ、特定の危機以外にも子育て上の問題に特に注意を払いながら、コミュニティを基盤として、年長児や、私的なメンターや仲間との近隣組織を利用する有用さを語っている。

研究方法

まず、ワルシュの家族レジリエンス概念の指標により家族レジリエンス尺度を作成し、その妥当性を検証する数量調査の予備調査を行うと同時に、項目についての信頼度を高めるために半構造化聞き取り調査を行った。その結果、家族レジリエンス尺度の妥当性が検証されたが、同時に、予備調査における回答者は個人であり、その個人による家族レジリエンスは、家族の社会的経済的な状況や、相互の人間関係の影響を受けるということが明らかになった。また「家族の危機と回復」というテーマで面接調査を行った。本稿ではこれらの結果を、ワルシュの指標や子どものレジリエンスの指標等を下に考察する。

ワルシュの家族レジリエンスの指標と 家族レジリエンス尺度作成

1. 家族レジリエンス概念を尺度化するにあたっての前提

家族レジリエンスは前述のようにあくまでも、家族が危機から回復に至るプロセスにおい

て自然に働く力である。つまり、システム論的家族療法の場合は、セラピストも含めた家族の相互作用のプロセスを見るものであり、その故に「診立て」、「アセスメント」と言われるような、家族や個人の病理や問題点の分析をするよりも、その時点、時点での相互作用を見る。故に家族アセスメントと言われるような過程は、セラピストと家族や家族とその周辺システムへの相互作用が変化するがゆえに、固定的なものでなく、刻々にセラピスト自身がなすアセスメントによる会話が、新たな会話を産み、それらの過程を通して家族は変化する。故に、家族アセスメントは随時に変化しながら行われるものである。そのアセスメントについても、家族レジリエンスという概念におけるワルシュのスタンスは、家族機能からの逸脱を見るのではなく、ストレングスを見、家族に「傷は残ったとしても基本的には無事」であるようにレジリエンスを招聘するような援助であり、介入方法なのである。つまり一つの家族へのアプローチの方法なのである。

ワルシュは基本的な家族レジリエンスアプローチのためのシステム論的スタンスとして、

- ① 個人の困難は個人、家族、環境的要因の相互作用として理解されるべきである。
- ② 危機的状況やその継続は、家族全体のみならず、個々の家族メンバーに影響する。
- ③ 家族のプロセスは、家族メンバー全員の相互関係に影響する。保護的なプロセスは、ストレスに打ち勝ち、回復を導き、レジリエンスを養うものであり、不適切な反応や不適応は脆弱性や個人と関係性のリスクを高める。
- ④ すべての家族は、レジリエンスが働く可能性を持っているのだから、それは最大限可能に機能しうる。

また、Jeanne C. March¹⁵⁾は家族のストレングスについては多く語られているが、evidence-based なリサーチや理論化による説明がきちんとあされておらず、言葉だけがひとり歩きして

いることへの懸念を表明している。Moore¹⁶⁾は、家族のストレングスを「とりわけ逆境や変化の時にあって、家族や家族員を支援し保護する関係と過程」と定義付けており、親密さ、配慮と相互作用のレベルを問題とする。ストレングスモデルは病理モデルから長所に目を転じようとする動きであり、家族レジリエンスはワルシュが述べているように「いかに家族が失敗してきたか」から「いかに家族が成功するか」への志向性の変化であり、家族ストレングスのリサーチは、次のようであるべきだと述べている。

- ① 家族ストレングスの指標として家族関係と家族の行動の質に焦点付け、
- ② 家族生活の異なった発展的段階を表明する家族ストレングスの目安を探し、
- ③ 家族の社会的、経済的なコンテクストの影響を認識することに焦点付け、
- ④ 家族のプロセスと関係への文化的な影響を認識することに焦点付ける。

これらの前提の上で、ワルシュはセラピストが家族に働きかけ、家族レジリエンスを促すためのポイント9要素を挙げた。そのワルシュの挙げた臨床的ポイントは次ぎのようである。

I 信念体系

- ① 逆境に意味を持たせる。価値を共有し、関係性に基づいたレジリエンスであること。家族周期に注目し、逆境や苦難を一般的なものとして概念化できること。一体感の下に危機を意味ある、理解できる、コントロールできる挑戦とすること。
- ② 肯定的な見通し。積極的な率先と忍耐と、勇気とをエンパワーする（力を促進すること）事ができること。希望を持ち続け、楽観的な見通しを持つこと。ハンデに打ち勝つ自信を有し、長所と可能性へ焦点付けること。可能なことが何かを修得し、変化しえないものは変化しないものとして受け入れられること。
- ③ 超越性と精神性。より広範な価値や目

的、精神性は重要である。信仰やコミュニケーションと儀式を共有できること。新たな可能性、創造性、英雄を想像することでもある。変容を信じること。逆境から学び、それによって成長できること。

II 組織的なパターン

- ① 柔軟性。変化しうる余地があり、時間をかけて挑戦に耐えるように立ち直り、認識し、順応すること。安定性によって均衡をとり、混乱を通しての継続性と独立性を保ちうること。
- ② 結びつき。相互サポートや協働すること。やかかわり合うこと。個々のニーズと差違や境界を尊重すること。
- ③ 社会経済的資源。拡大親戚システムや社会サポート、地域ネットワークを動員すること。経済的保障を打ち立てること。仕事と家族、一族とのバランスをとること。

III コミュニケーション・プロセス

- ① 明晰性。明晰で一定したメッセージを言葉や行動で送りうること。曖昧な状況を明確にでき、真実を求め、率直に語ること。コミュニケーションの過程を共有すること。
- ② オープンな情緒的表現。喜びや哀しみ、希望や恐れ等において、お互いにひどく違う感情を分け合うこと。相互共感や差違への寛大さを持つこと。自分自身の感情や行動に自分が責任を持ち、互いに責めないようにすること。愉快な相互交流、ユーモアの重要性。
- ③ 問題解決への協働。創造的なブレインストーミングができること。リソースの豊かさ。決定権が共有され、折衝や交換において、公正さが求められる。目標を焦点化し、具体的な段階を踏むこと。成功を築き、失敗から学ぶこと。

2. 家族レジリエンス尺度の作成と数量調査の予備調査の結果^{註3)}

これらの家族レジリエンス概念に注目し、家族システムをみる視点として、ワルシュの記述に基づき9要素44項目よりなる家族機能尺度(FRI)を作成し、予備調査を2003年1月に行った。FRIの妥当性を検討するものとして、FACESKGⅡ—子ども版(立木、1990)¹⁷⁾およびSCI(ラザラス式ストレスコーピングインベントリー、日本健康心理学研究所)¹⁸⁾を用い、対象は福祉系大学生、有効回答数は221名(男性61名、女性158名)であった。FRIとFACESKGⅡおよびSCIとの関連を相関係数によって検証した結果、FRIの妥当性は検証されたものと考えられた。今回の調査対象であった青年層においては、家族レジリエンスは、オルソン円環モデルで言う家族のきずなを反映し、回答者の男女差や所帯主の職業との関わりも影響していると考えられた。これは例えば、ワルシュのモデルを日本で援用するに際してもっとも適用しにくいと思われる超越性と精神性について、調査においても所帯主の職業との関わりが顕著であったこと等から個人のレジリエンスと家族のおかれた社会的状況と家族レジリエンスとの相互影響過程について検討が必要であると思われた。また、自由記述においては家族の危機を感じ積極的に乗り越えたと言うような回答は少なく、青年層においては、家族危機を経験したという認識を持っていないことをうかがわせた。これらの結果により、家族のおかれた経済的、社会的、文化的コンテクストに焦点付けること、家族周期上の危機と、調査対象者のライフサイクルを考慮すること等が今後の課題として呈示されたと考えられる。調査項目について今回の結果や日本的な文化との違い等を通して、より実際の家族臨床ツールとしての信頼性を増すように修正を加える必要があると考察

註3) 本研究について、第21回家族心理学学会全国大会(2003年、東京)において「家族支援に有用であると思われる家族レジリエンス概念を用いた家族機能尺度(FRI)の作成の試み」で口頭発表を行った(共同研究者日下菜穂子)

された。

3. 「家族の危機と回復」の聞き取り調査から

予備調査と同時にある地域子育て支援グループにおいて聞き取り調査を行った。「家族の危機と回復」とのテーマで、FRIの質問項目やウォーリン等の子どものレジリエンスの7項目等から作成した質問項目による半構造的面接であったが、主な質問の骨子は「これまで家族危機と言いうような体験をしたことがありますか。あったとすれば、それはどのように終息しましたか」だった。対象者は地域での子育て支援ネットワークから募り、時間的な条件のため結果的に2名の面接となった。2例に過ぎなかったこと、内容的にも所謂「定型家族」とは些か趣きを異にする「人生の語り」となったこと等から、本来このように発表するには妥当ではないかもしれないが、ひとが持つ「家族」のあり方をむしろ浮き上がらせる面もあり、今後の家族レジリエンス概念の一層の考察や、尺度の調査項目の洗練化に役立てるには、かえって「一般的な」家族への示唆に富むものとも思ひ、本稿において紹介することとした。

田中さん(仮名)と山田さん(仮名)は子育て支援活動からドメスティック・バイオレンス防止のためや、地域における養護や介護等についての人権意識の昂揚を図る活動を活発に行っている。二人とも10年近くの活動仲間であり、調査は山田さん宅で行われた。

① 田中さんの家族

田中さんは50代前半の一人暮らしの女性。地域での子育て支援ネットワークを始めとして、幾つかの人権運動にかかわっており、その中の一つの事務局担当で生計を立てている。

家族は出身地に母親と妹がいる。妹からの電話等はあるが、こちらからは送金する以外は連絡をとっていない。

田中さんの話しはいきなり「妹が買物症候群で、この間もお金を送ったところなんです」と

いう言葉から始まった。母親は高齢者で施設の入所待ち。妹は離婚して小学生の娘がおり、「家族」のような情愛を感じるのは姪だけ。子どもの頃の原家族は両親と妹の4人家族であったが、家族という感じではない。父親は、信念の人で、その故に職が定まらず、田中さんが小学校2年生まで母親の実家で親子3人で暮らしていた。母親の実家は昔風の大家族制の農家で、祖母と叔父家族で暮らしていた。父親は母親より12歳年上で、離婚歴や家柄の違いなど、母親の両親に反対されての結婚だった。子どものころの家族というイメージは、その母の田舎での貧しくても平和な落ち着いた感覚が蘇ってくる。お金はなかったが、楽しく友人と遊んだ記憶がある。父親は不在でも存在感があった。だが、近隣の年上の少年に性的いたづらを受けひどく傷付いた。自分で「自分の人生は終わった」と封印して乗り越えるために勉強した。誰にも言わなかった。それでも、こころのふるさはそこだし、子ども時代の家族という、その風景がこころ休まる風景として蘇ってくる。その後父親が職を得、都会で核家族で暮らすようになったが、いつも両親がお金のことで喧嘩しており、まったく憩いの場もなく、楽しかった記憶はない。勉強ができることだけがアイデンティティとなっていたと思う。母親には「勉強できる」と自慢されただけで、大事にされたという記憶はない。父親には大事にされ、本の話や思想的な話を多く聞かされ父親を尊敬できた。今日の様々な活動の根源的な力はそのときに養われたような気がする。しかしながら、厳しく怖い父親でもあり、やっぱり「遠いひと、かな」とのことだった。地方の国立大学に進学したが、すぐある組織にオルグされ、その活動のために遠方の大学に編入。今、考えると、女性であることを確認するためだろうか、すぐにその活動のリーダー格の男性と同棲を始めた。癒しを求めたのだろうが、思想に生きるものはストイックでなければならないという思い込みが平和な結婚に至る同棲生活を許

さず、仲間にも内緒だった。その葛藤が辛かったが、平和な暮らしを許さなかったのは彼であり、その葛藤で悩む自分を支えたのも彼だった。彼とは20年間近く同棲していたが、家族や家庭生活を営むこととは違った。「フツー」の暮らしではなく、「フツー」の暮らしが何なのかと考えたこともなかった。ただ一途に彼とその活動に尽した。彼は夫だとか、パートナーだという意識もなかった。お金も自由にならず、毎日の暮らしが不安定で、食事一つにしても作って待っているという感じはなかった。彼には彼女を守ろうという意識があり、彼女は彼を尊敬できた。そうしたこころの繋がりはあったかもしれないが、1対1の関係なのだ（不倫はダメ）という合意だけが、パートナーとして互いの絆だったのかもしれない。彼は離婚していたが、子どもがいた。自分には子どもがいない。子どもが欲しいなどと考えたこともなかったのに、それは辛かった。結婚というイメージではない。40歳を迎える頃に彼が活動から疎外され、現在の地方都市に逃げて来た。生活の手段がなくなったので、田中さんが今の地域活動の事務局に就職して生計を得た。初めてお給料を貰ったとき、それは初めて自分の自由になるお金だった。どう使ったらよいかわからず戸惑ったがともかく実家に送金した。その時「自分のお金を稼いだんだ」という実感があって嬉しかった。運動を志したときからフツーの暮らしなんて考えていない。窓のある暮らしなんて考えられなかった。就職して、アパートに住んで、窓があって、カーテンをかけて、フツーの暮らしってこうなんだと不思議だった。彼とはその後何となく別れた。今は当時の活動の仲間とも今は連絡をとっている。懐かしいし、みんなフツーに小市民をしていてフツーに昔の友人としての付き合いもある。彼らが自分の家族だ

と思ったことはないが、「家族の一員だった」ような気がする。

今は事務局を中心とする仲間たちがここで近くに住んでいて、自由にお互いに出入りして家族のように付き合っている。殆ど秘密もない。一緒に住んでいる訳ではないが、「いつでもそこに人がいる」という安心感を貰った。考えてみると自分には準家族が多い。原家族も準家族という感じ。家族ではない。でもここは「帰る所」ではある。自分が男性を好きになったら、その男性を追いかけて家を空けることもあるが、それでも仲間はいつでも暖かく迎えてくれ、帰るところがあるという感じでは「家族」。ここに帰る家があると思う。原家族も家庭ではないが、ふるさとではあるし、自分が死んだら本当に泣いてくれるという点では家族なのだろうと思う。でも、母は見せるために泣くだけだろう。妹は母をひとりで引き受けていて、何かと精神的に不安定らしいので可哀想だが今の自分には余り関係あるとは思えない。今の家族とは本当に関係ない。お金は可哀想だから送る。父親が死んだときは泣いて、彼が慰めてくれた。そのときの彼は家族のようだった。

今、「家族は？」と聞かれたら「ひとり」と答える。誰か男性と恋愛すればその人のところに行ってしまうかもしれないが、その男性と平和な新しい家族を作るとは思わない。むしろ、その後ここに帰ってきて地域の仲間とグループホームのように暮らす方が現実的なような気がする。

② 田中さんの家族と個人のレジリエンスと家族レジリエンス：田中さんの4つの家族^{註4)}

田中さんはひとり暮らしであるが、原家族は母と妹と姪が地方に住んでおり、4つの家族を持

註4) ここで家族と家庭の違いについて厳密にすべきなのであろうと思うが、家族はひとであり、家庭は場所であるという簡単な単純化はできないことが、田中さんが「家族と家庭は違うけど、ともかく自分の場所が家族だ」と語ったことから示唆される。本稿では地域的な影響力が家族レジリエンスの要因であることを述べており、敢えてその定義や違いの固定化は避けた。

っていたとも言う。子ども時代の家族、核家族、私生活という点では殆ど空白の20年間とは言え、カップルで暮らした20年間、今の地域の「準家族」である。一番目の母方の実家は、容れ物としての家。のどかな田園風景。隠れる場所がある。地域で育まれる。両親や祖父母に特に思い入れはない。自分の成長してきた原点。性的ないたずれでひどく傷付いた筈なのに、そこが懐かしい場所であるのは、いたずらに感覚麻痺させているというよりも、彼女がそれ以降持った家族にやすらぎがなかったことを表わしているようにも思われる。自然や心象風景の環境の持つ治癒力が浮かび上がってくる。2番目の核家族での暮らしだが、都会で核家族だけの暮らしは、喧嘩の絶えないところを閉ざして大学に行けばこの家を出られるという一念で勉強する以外、家族にも家族以外にも殆ど関わらない暮らしであった。3番目の活動仲間の彼との暮らしは、二人で暮らしていても生活、家族という感じはない。自分は自分の独立した存在として、違いに拘束しあわない共棲生活だった。性的関係を他に持たないことや、彼を尊敬し、彼は彼女を守ってくれる二人だけの絆があった。自分たちの暮らし方に疑いを持ったことはなかったが、思い出すとその20年は苦渋に満ちている。「生活者」ではなかったからだろうか。そして4番目の今の地域共同体の友人や仲間。このひとたちとは将来的にはグループホーム等と一緒に暮らし家族となるかもしれないが、それでも家族ではない。なぜならばその人びとにはめいめいの家族が居て、その家族が優先だからである。でも家族同然で「帰る場所」ということでは家族のような気もする。

こうして、田中さんの4つの家族はすべて、田中さんにとっては家族ではない。田中さんは必ずしも平均的な子ども時代を過ごしたとは言えないだろうが、子どもにとって平和で田園的な空間が家族の原点でもあること、場合によっては家族よりも地域環境の方が影響力を持つ場合もあることを示唆している。田中さんがそん

な子ども時代を「サバイバル」してきたのは、一重に「成績が良い」というアイデンティティであった。「いつも勉強さえしていれば、何とか居場所がある」という感じだった。子どものレジリエンスにとって必要であると言われる、誰か意義深い大人の存在¹⁹⁾という点では、父親の存在が大きい。社会的、あるいは、親戚、地域システムの中では余り認められない存在であり、父親本人にとっても本意ではない暮らしの中で娘に伝えたかったことが、辛い子ども時代を通して娘の支えともなった。その父親との精神的繋がりがその後の田中さんの生き方を決定して行った。それが公私ともに半ば地下生活のような暮らしへと繋がったとしても田中さんには後悔はない。

また、ウォーリンの7つの個人のレジリエンスの点ではどうであろう。子ども時代の彼女には少なくとも洞察力、自立性、創造性、モラルの力、何かや誰かに愛着し、自分から他者との関係を募り、結びつける関係性や、何かをうみ出し、それに取り組み、詳しく探ろうとするイニシアティブも持っていたように思われる。ユーモア感覚も子ども時代については、「暗い子どもでもあった」との述懐があるが、少なくとも現在の田中さんには、様々な逆境を「笑い」で超えてきたというユーモアの感覚はあるように伺われる。地域で他の子どもたちと自由に遊んだ活き活きとした感じは言葉の端々から伝わってきた。ところが、少女期に都会で核家族で暮らし始めた途端に、彼女は関係性やユーモア感覚を失って行き、特殊な生活様式で20年過ごすことに繋がっていく。核家族での地域とは遊離し、両親の間に葛藤の絶えまない暮らしは、残念ながら田中さん自身が「家族とは言えない」と語ったように、子どもの育成を促進する家族機能は働いていなかった暮らしであったようである。つまり、田中さんは従来語られてきた誰かひとりの意味ある大人の存在やウォーリン等の語る子ども自身のレジリエンスによってサバイバルした例であると言えよう。しか

し、同時に田中さんはその家族の中で立派にサバイバルし、レジリエンスを養ってきたこともまた事実である。田中さんが30歳の時に定職を得て、安定した暮らしの後に父親はなくなっており、その家族が分裂しなかったのは家族レジリエンスが機能したゆえかもしれない。しかしながら、田中さんの妹にとっての家族は、父親が職を持たなかった家族の始まりに遡って常時危機にあり、回復に向かわないまま、姉が家を離れ、帰省することもなく、父親が亡くなり、今だ機能していないままなのかもしれない。ここで家族を語るときの窓口は、結局個人であり、ゆえに個人の「家族体験」であることが窺われる。

田中さんの原家族をワルシュの家族レジリエンス指標で見たときには、両親の結婚初期から父親が別居という形でありながら、家族として存続したのは、共通した社会信念とそれによって社会的不利益を被ることは相互理解の上での結婚であったことから、超越性と精神性が家族のバックボーンとして存在したことは大きな要因であったように思われる。しかしながら、逆境を共に戦ったり、その過程におけるコミュニケーションが必ずしもスムーズとは言えなかったり、家族関係やそれぞれの生き方に関して柔軟性に欠けていた等も推測される。父親が失職し、母親の実家という社会的資源を動員できていた時の方が「家族」らしく、父親が職を得て、社会的資源を活用する必要がなくなったが、地域的に孤立してからの方が家族という実感を田中さんが持てなかったことは今日的な地域福祉のニーズについて示唆的である。

しかしながら、田中さんが自ら築いた自分自身の家族である彼との暮らしには、逆境や苦難を一体感の下に乗り切ってはいたが、それは彼らにとっては危機というよりも日常であり、そこで二人だけの凝集性は高まっていたと想像できる。「家族」という意味での肯定的な見通しを共有していたとは考えにくく、共有できる信念はあったが、それらが将来の見通しや家族維

持に肯定的に機能していたかは疑わしい。結びつきは強いが、柔軟性にかけるものであり、同等のパートナーであったと言い難い。また、社会経済的資源を家族のために使うという発想はなかったように思われる。コミュニケーションも活動上の連絡事項のようなコミュニケーションしかなかったが、その不満を彼女がぶつけたことはない。これらの点から、ワルシュの言う家族レジリエンス指標からはかなりずれており、その点から言えば、田中さんが家族であると感じられなかったのは当然であるとも言える。

現在の地域コミュニティは、ワルシュの言う家族レジリエンス概念はすべて満たしているとも言えるが、例えば同じ逆境や同じ危機を一緒にし、その危機に際して地域コミュニティシステムにレジリエンスが働くかや、働いたとしてもそれを家族的な危機の回復過程であったという意味付けをなしうるかについては議論のあるところであると思われる。

ここで田中さんに関して容易に可視的なのは、ワルシュの言うような肯定的な機能を果たしていたか否かは問わず、同じ信念を共にしているという感覚が「家族」の凝集力を高めるといことであろう。田中さんのような同じ信念をを共にする家族に生れ、信念の内容は違うが、彼との暮らしも、現在のコミュニティも強い運動組織としての凝集性を持っているという点で、前述のように、精神性と超越性と言う言葉で想起するものが様々な日本にあっての特殊な例とは言え、それらを共有することが家族的であることの一つの例であると思われる。また、田中さんは様々な状況を自分や社会的資源（現在のコミュニティ）で乗りこえて来ていたが、その支えられているという感覚が田中さんを支えている。

③ 山田さんの家族

山田さんは一人暮らしの50代後半の主婦。同じ子育て支援グループのリーダーをしてい

る。夫は公務員で山田さんのいろいろな地域活動を支えてくれたが、昨年逝去。就職して近県で一人暮らしをしている長女と、きかれれば「やはり3人家族」のような気がするし、一応答えるなら「家族は今娘と二人」。

山田さんの家族についての話しも、現在の家族ではなく、原家族の話しから、しかも出生の秘密を知った高校生のときから始まった。「実は私は貰い子だったんです。」突然実の姉という人が訪問してきた。姉は懐かしさから来訪のようであったが「いやだ!」という感じの方が強かった。姉も他家の養子で、早くからそのことを知っており孤独だったようだ。母親は男性と一緒に暮らしたり、ひとりで暮らしたりで、いずれにせよ、二人にとって父親のような存在は始めからいなかったらしい。自分の出生は歓迎されたものではなく、たまたま子どもを欲しがっていた今の両親のところに貰われてきたらしかった。そう言えば、祖母に一度だけそんなことを言われたこともあったが、深く気にとめていなかった。もともと愛情深く育てられたという感じではなかったが、姉の来訪はショックはショックだった。それまで全く自分が家族と血が繋がっていないなどとは考えたこともなかった。自分が出生の秘密を知ったことをうすうす原家族は知っていたとは思いますが、何も言わなかった。それが救いのもでもあり、重荷でもあった。10年前に実母が高齢者施設に入所したときに姉にも母親にも一度だけ会った。自分に会いたいというので出向いたが、会っても何も感じなかった。全くの他人という感じで、恨みもなく、終始無関係な人という感じだった。母親が死んだら通知が来るだろうから、まだ生きているのだろうが、全く興味はない。

山田さんが養子であった原家族も、父親は飲酒しては暴力を振り、生活費もままならず、母親の女手ひとつで育てられたという感じであった。家族に対して良い感じは持っていないが、母親だけが必死で育ててくれたことには感謝しているし、母親にはそれなりの思いもある。だ

が、その家にいるのはいやで一日も早く家を出たかった。就職して、その関係で夫に出会い結婚した。とにかく家を出るための結婚だったような気もする。22歳だった。ところが夫と二人だけの新婚生活だと思っていたのに、夫は7人きょうだいのひとり息子で、何かと親戚からの干渉があった。地域的にも親戚や代々の付き合いのある近隣の人々の間で自分は他所者のように感じた。夫は社交的な人で、地域をとりまとめる立場にもあり、いつも外か家でみんなと呑んで語ることが多かった。夫は人柄の良い人だとは思いますが、家ではまったく寡黙だった。家の内向きのことは自分に任せられていたが、外向きのことは一切知らされなかった。経済的に任されていたので、付き合いの多い夫の交際費をまかなうのは大変だった。娘もそんな夫に反発して、子どもの頃はなつかなかったし、反抗期をすぎてからは殆ど口もきかなかった。夫も敢えて娘に働きかけようとはしなかった。

実は家族危機を迎えたことがあり、それは山田さんが「北京女性会議」に出席して、色々なことに目覚めたことが契機だった。北京会議に行ったのは、地域の仕事を半分ボランティアでしている山田さんが「行ってみないか」と言われたので行っただけで、それまでは夫を支える生活に余り疑問を持たなかった。ところが、会議以降は、夫がいかにリーダーシップをとりながら、自分に依存しているかということがよくわかるようになった。無条件で夫の仕事を手伝ったり、夫が仕事だと言って勝手をすることが許せなくて、夫婦の間で葛藤が増えた。冷え冷えとした生活が続き、離婚も考え始めた頃、夫が病いに倒れた。夫は半年患って亡くなったが、その病室で、親子3人で初めて話しができた。夫がしていた地域の仕事は自分が継ぐことになり、夫が亡くなって悲しむ暇もなく仕事が忙しくなった。娘も半年くらいは無理して自宅から仕事に通ってくれた。夫が亡くなってから初めて「家族だったのだ」という気がしている。娘も別居生活に戻り、今はひとり暮らしだ

が、近隣や仕事仲間のひとたちと一緒に仕事をしていると淋しいとは思わない。老後もひとりでこのように仲間と一緒にやっていくのだろうし、娘に期待しない。遠くの母親が亡くなっても、だからどうなるものでもないだろうしこのままだと思う。

山田さんにとっての家族危機は家族周期上の危機と対応する。第1に結婚したとき。場所が違えば文化も違う土地で、親戚等の地縁、血縁的密接な繋がりの中で、山田さんの仕事は親戚や近隣のひとびとと一緒にの仕事で、そのリーダー格の夫の嫁としての日夜は疲れるものであった。この危機は出産や夫のサポートによって乗りこえたものと考えられる。第2の家族周期上の危機は娘が成長し高校生になって娘は父親にも反抗し、自分にもどこか隔たりのある様子だった頃である。この危機は回復しないままに新たな危機を醸成していたとも言える。第3の危機は夫の死であるが、これは夫の仕事を受け継ぐことと娘との一体感で乗りこえたという実感を持っている。最大の危機は山田さんが「北京女性会議」に出席して目覚めたことであった。余り社会的経験もないままに結婚し、年長の夫に導かれるままに妻をしてきた自分が大きく変化した。従来の夫婦にありがちな夫のパターナリズムに依存して生きてきた妻が目覚めて夫婦仲が危機になると言うのは、子どもが成長し、反抗期を迎え、巣立つのに似ている。山田さんいわば反抗期の半ばで夫が病臥し、対等なパートナーとなる前に亡くなってしまったことになる。だが、山田さんには、看病中に夫が初めて自分に礼を言い、対等となって亡くなったという実感がある。だからこそ、夫の地域の仕事も自分が継続することに抵抗がないのだと思う。あのままだったら、自分は完全に夫と違う事柄の活動をしていたと思う。

原家族については、弟への情はあり、今も普通につきあっているが、一般的な付き合いに留まっており、父親が危篤の時も行かなかった。母親には情愛が残っているが、一生懸命育てて

くれたことに対する感謝であって、結局は自分の家族ではなかった様な気がする。今の家族と言えば、夫、娘に加えれば親戚、コミュニティと友人である。

④ 山田さんの家族と個人のレジリエンスと家族レジリエンス

子どもの山田さんにとって、明らかに出生の秘密を知ったときは危機であった。それを乗りこえたのは、山田さんの持つ洞察力、「独立性」、「モラル」のようであり、また、新たな家族に恋着するよりも今の家族と淡々と従来通りの日常を送ろうとした「関係性」であったと思われる。山田さんの成長にとって家族の機能は、とりあえず、安全な環境を与え、愛情と支援を与え、肯定するものであり、結果から考えると子どもの適応のコーピング・スキルやそれに伴う能力を育んだと言えよう。決して出生の事実がなくても理想的とは言えない家族であったが、母親が、というよりも母親が困難に耐えている様が意義深い大人として影響を与えていたと言えよう。ただ、その母親や母親が努力して維持しようとしてきた家族は山田さんにとっては早く自分の家庭を持ちたいという願いを育むだけのものであり、自分の家族ができてからは母親は反面教師としての役割しか持たなかった。山田さんは愛育的な環境で子育てをしてきたつもりだが、自分自身の人生を見据えてずっと働き続け、子どもとのきずなは深くても、大学入学時には別居するというように子離れには氣を使った。

山田さんの核家族の「きずな」は深いように思われる。夫の家族意識の中には、昔の大家族制のように、親戚、職場、地域の共同体の家長意識が強かったようだったが、病室で3人での語り合いが「儀式」のように、夫が3人だけの核家族の一員であることの再確認となった。

山田さんの家族は子どもにとっては、安全な環境を確立し、愛情と支援を与え、肯定し、コミュニケーションも機能し、ポジティブなアイ

デンティティの維持も可能であったと思われるが、問題の解決機能に関しては子どもの離巢の前の危機的状況や、夫婦の価値が違ってきたことの問題解決に関しては十分に機能していなかったかもしれない。また、効果的なコミュニケーション、子どもの適応のコピーング・スキルやそれに伴う能力を育む、悪影響を与えるような出来事から遠ざけ、適切な会話に参加させることによって適度に愛情のある社会的な達成を助け、オープンなコミュニケーションによって、不適切な挑戦にもトライさせる点においては、地域も含めた家族全体で子どもの育成の場となっていたという点では機能していたと思われる。そこで、ワルシュの家族レジリエンス機能であるが、逆境にあっては、むしろ一体感の下に危機を意味ある挑戦となし、新婚の新たな家族を作るに当たっても、娘が父親とぎくしゃくし始めたときも、積極的に忍耐し、可能なことが何かを修得し、変化しえないものは変化しないものとして受け入れながら、相互にともに問題解決のためにかかわり合いをしてきたと思われる。それぞれのそれぞれのニーズや相違、境界も尊重されていたと言えるが、それは山田さんが夫と仕事で出会い、公私にわたるパートナーとして結婚したという前提によるところが大であると考えられる。その意味で良くも悪くも、拡大親戚システムや社会サポート、地域ネットワークを動員し、経済的安定性には恵まれていた。ただ、仕事と家族や親戚とのバランスについては、仕事や親戚がむしろ過剰であり、その時代的、地域的背景、二人の力関係等で十分に機能しておらず、それが夫婦の葛藤となったものと思われるが、結局は赦しや忘却による和解が可能となったのではなからうか。信じるものは同じであるという信念体系を共にできたことがこの家族を支えた最大の点であると考えられるが、それだけに、「北京女性会議」で山田さんの仰ぎ見るものが従来の夫や夫の仰ぎみるものと異なってきたのが、夫婦関係の葛藤を簡単に解決できない溝に深めたのであろう。ただ、

「ではもしもご主人が病気になられなかったら」という問いには「もともと私が強くなっていたから、別々のことをすることを夫は認めていたし、夫も変わったと思う」との返事であった。変化にあって、変わりうるものとして家族関係を捉えており、それは、柔軟性や相互の結びつき、相互に尊重しあう独立性を保ちえた関係として今後は同等のパートナーとして再結合しえたことをうかがわせた。コミュニケーションはオープンで明晰であったかはともかく、それなりに疎通しており、母子においてはかなり問題解決への努力も含めてなされており、夫婦間も北京女性会議を契機にこれからよりオープンなコミュニケーションの共有が可能になったと思われる。

夫の病気、死別で、過程の半ばで終わってしまったのかもしれないが、山田さんは家族周期上の危機や、「北京女性会議」において、「主婦」が「自己に目覚める」という危機を、相互の人格を尊重した上で、コミュニケーションすることで、その危機を乗り越えたと言えよう。山田さんの言葉の端々には、そうした自分への信頼と強さがうかがえ、また、夫にもその変化を共に乗り切る柔軟性があったものと思われる。「言っても、そんなに変わったわけでもないけど」と何度か山田さんは語っていたが、変化とはドラスティックに変化するものではないという現実とのすりあわせ能力の高さをうかがわせる。

家族レジリエンス調査の考察

これら二つの聞き取り調査から浮かび上がってきた点は、この2家族が必ずしも平均的な家族ではないということを踏まえた上でも、人は一生に一つの家族しか持たないのではなく、家族というときは、「原家族」も含めてのprocess-orientedな語りになるということである。まして、今後予想される離婚と再婚の増加を考える時、混合家族への働きかけについての欧米の文献は数多く、ワルシュ等は新しい家族

周期の段階を呈示²⁰⁾しており、家族という集合がその組織体が絶えず変遷していく以上、家族周期上のそれぞれの段階上での家族は異なっていくこと無視する訳にはいかない。それが本FRIを臨床的に用いる有用性となるかと思われる。また、家族の精神的な信念体系が子どもも支えうるもの、そして子どもに大きく影響するものであることを考えたとき、今一度家族の価値観を考慮することが必要であろう。それはつまり、その社会の価値観でもあり、例えば山田さんが、新婚の頃、親戚や地域に耐えたのは、時代と地域の文化のゆえであろうし、また、北京会議に参加し、そこで変化し自分なりの社会活動への参加が家族の危機となり、それでもそれなりに回復したのも、現代社会の一断面であろう。

社会システムの変化やそれと個人の関係の変化は、家族関係を混乱させるかもしれないが、新たな家族関係での家族として再生するためには必要なプロセスであると思われる。つまり、家族は、家族員の変化に伴って日々変化、生成するものであり、それが自然であり、その自然な過程を乗り切ることが、家族レジリエンスなのであるが、そのためには、ワルシュ等の挙げた要因が全て必要と言うわけではなく、どれか一つでも良いから何らかの要因が強く機能することが必要であると考えられる。

また、子どものコーピング・スキルはサバイバルに当っては有用であると考えられるが、その子どもに内在する、或いは家族の中で育まれたスキルは、どの子どもにもあてはまるもののように感じられる。故に、ウォーリン等が語るように、あくまでも個人の自己評価を高めるための再確認事項として取り扱うことがより機能的であると考えられる。

これまでに述べて来たように、個人が家族の語りの窓口である以上、家族の危機と回復は個人の危機と回復の物語りとなり、そこにおいて、家族システムを全体としてどのように捉えたらよいかが家族を同定する際に時間軸で考え

られることから浮かび上がってくる。例えば、中年であれば、原家族を語るときには、現在の核家族の拡大家族と、子どもの頃の家族の原風景とも言える2つの相で現れるが、同時にそれは個人のレジリエンスを涵養する家族機能をも現わすともとることができるかもしれない。これは、青年層への数量調査において、彼らが余り家族危機を感じたことがないことから、家族周期上でも家族の危機と回復を主体的に引き受けざるをえない所帯主の世代への数量調査をする必要性が考えられるが、その時、原家族と現在の家族を統合的に家族と考えるひともいれば、二つの家族を別々のものとして一つを選ぶひとも、二つを時間軸に沿って考えるひともいるだろうということに配慮すべきであろう。

終わりに

本稿では家族レジリエンス尺度の妥当性を検討するための大学生対象の予備調査の結果と子育て支援グループの中年女性の聞き取り面接から、個人のレジリエンスと家族のレジリエンスの関係について、また地域、社会経済的な背景との関係について考察した。

家族の機能は家族そのものが危機にあってレジリエンスを発揮して家族を危機から回復するのみならず、その過程を通して個人のレジリエンスを涵養することともなる。ラターら²¹⁾はレジリエンスモデルに基づいた複合戦略を考えるに際して3つのアプローチを紹介している。それらは、危機焦点化（危機に曝されることを減じ、困難を避ける）、長所焦点化（子どもの資源を増強し、子どもの生活の鍵となる長所を向上させる）、過程焦点化（ひとの適応システムの力を動員する）であるが、いずれもレジリエンスに言及するときは、固定的なものではなく、前向きに変化しうる長所として機能するという点で共通していると思われる。

FRIは危機から回復へのチャレンジとして臨床におけるツールとして用いられるのみならず、家族システムに対してだけでなく、地域、

教育の場等で、個人や家族レジリエンスに着目した上での試みがなされることに寄与すると考えられる。今後、子どもを育む家族、社会経済的状况が子どもにとってより機能的であるためには、まず地域におけるおとなたちの状態がウェルビーイングになりうるようなメゾ・マクロ的な働きかけが肝要であり、今後そのための有用な提言をなすためにも、個人と家族システムとの関係性における家族レジリエンスの特徴的な指標を考察していく予定である。

付記

- ・本研究は平成13年度－15年度科学研究費補助萌芽的研究の助成によるものである。
- ・本稿に紹介した聞き取り面接は、個人を特定できないように、対象者の承諾の上でその設定を変えている。
- ・本FRI作成とその予備調査は同志社女子大学現代社会学部社会システム学科日下菜穂子氏との共同研究であり、ここに謝意を表すものである。

注

- 1) 得津慎子 (2000) 「家族援助における家族レジリエンスという視点－システム論に基づく家族療法の事例を通して」『関西福祉科学大学紀要第3号』
- 2) 得津慎子 (2003) 「家族レジリエンスの家族支援への臨床的応用に向けて」『関西福祉科学大学紀要第6号』
- 3) Walsh, F. (1998) *Strengthening Family Resilience*. NY: The Guilford Press.
- 4) *Ibid.*
- 5) Walsh, F. (1996) "The Concept of Family Resilience: Crisis and Challenge", *Family Process*. 35 (3), p 261-281.
- 6) Walsh, F. (2003) "The Concept of Family Resilience: Crisis and Challenge" *Family Process*. 42 (1), 1-17.
- 7) Hawley, D. R. & DeHaan, L. (1996) Toward ad

Definition of Family Resilience: Integration Life-Span and Family Perspectives. *Family Process*. 35 (3), 283-298.

- 8) 得津 (2003) 前掲書
- 9) Steven, J. Wolin & Sybil Wolin [奥野 光・小森康永訳]: サバイバーと心の回復力: 逆境を乗り越えるための7つのレジリエンス。金剛出版、2002 (原著1993)。
- 10) Werner, E. E. (1982) *Vulnerable but Invincible: A Study of resilient children*. NY: McGraw-Hill.
- 11) Norman Garnezy, N. (1973) Competence and adaptation in adult schizophrenic patients and children at risk. In A. R. Dean (Eds.), *Schizophrenia: The first ten Dean Award lectures*. New York: MSS Information
- 12) Luthar, S. S (eds.) (2003) *Resilience and Vulnerability: Adaptation in the Context of Childhood Adversities*, Cambridge, Cambridge University Press
- 13) Masten, Ann S. & Powell, Jenifer, L. A Resilience Framework for Research, Policy, and Practice.
- 14) Wyman, P. A., Sandler, I., Wolchik, S., & Nelson, K. (2000) Resilience as cumulative competence promotion and stress protection: Theory and intervention. In D. Chocchetti, J. Rapport, I. Sandler, & R. P. Weissberg (Eds.), *The promotion of wellness in children and adolescents*. Washington, DC: Child Welfare League of America Press.
- 15) Jeanne C. March (2003) Arguments for Family Strengths Research. *Journal of NASW*. Apr., Vol 4.
- 16) Moore, Chalk (2002) Scarpa & Vandivere, Family strengths: Often overlooked but real. *Child Trends*.
- 17) 立木茂雄 (1999) 家族システムの理論的・実証的研究。川島書店
- 18) 日本健康心理学研究所 (2002) ストレスコーピングインベントリー－自我態度スケール実施法と評価法－。実務教育出版
- 19) 得津 (2003) 前掲書
- 20) Carter, Betty, & McGoldrick, Monica (1989) *The Changin Family Life Cycle*, Allyn & Bacon.
- 21) Luthar, S. S (eds.) (2003), *Ibid.*